戸外で、ダイナミックに遊びます

自然環境豊かな場で子どもたちが日常的に思いっきり遊ぶ機会は、今の時代、なかなか望めないかもしれません。また、今どきは、保育施設の中には、園庭がなかったり、あっても十分な広さを確保できない園もあります。それでも、近隣の公園に出かけていく、近くの園の園庭に遊びに行く、あるいは、小さな園庭であっても、そこで息づいている自然を見つけ出してみるなど、保育士は工夫を凝らしながら、子どもたちが自然環境に触れ、その中でのびのびと育っていくように図っています。

なぜ、子どもの育ちには「自然環境」が必要なのか。それは、「自然」こそが、生命のめぐりを示してくれるからであり、時には人間の思い通りにならない限りなく大きな存在があることを知るからだといわれています。

自然はまた、寒い・暑いといった温感はもちろん、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触わる…など、人間の五感をフルに感じさせてくれます。五感の働きの豊かさは、物事が深くわかるときの原点を豊かにしてくれ、さらに多少の刺激の変化にも耐えられる耐性も育って、「何があっても大丈夫！」といえるようなたくましい子どもに育っていくのです。

ただし、子どもが思いっきり遊ぶとき、どうしても避けられないのがケガです。転んだりぶつかったり、そのたびに子どもは多少痛い思いもするでしょう。もちろん、保育園は、重大な事故につながらないよう細心の注意を払い、安心安全な環境を保つ努力は欠かしません。小さなケガを乗り越え、身のこなしを自らの身体で覚えつつ、健やかに成長していく子どもたちの育ちを応援しています。

5

乳児保育

子ども一人ひとりの成長に合わせ、健やかな育ちを支えます

保育園によっては、保護者の仕事などの状況に合わせて、0歳から赤ちゃんを託すことができます。赤ちゃんの時期は親が育てたいという考え方もありますが、保育園でこそ同年代の子どもと出会うことができる、そこでこそ社会性を育むことができるという考え方もあります。

乳児保育※は、まず、健やかに命を育む養護の取り組みが何より大切です。寝具や室内光量などに配慮して睡眠環境を整えたり、言葉をかけながらていねいにおむつを替えたり、また、その子の成育に合わせて授乳したり離乳食（初期・中期・後期）を工夫しつつおいしく楽しく食べられるように配慮するなど、保育者等は、常に一人ひとりの様子に目を配りながら保育に取り組んでいます。

そして、まだ大人に通じる言葉を用いない時期の赤ちゃんの「こうしたい」という意図を読み取っていくことも、専門職たる保育士の力です。表情、ふと発した声、手足の動き、そうしたところからも、赤ちゃんの気持ちを察し、意図を汲み取ったというメッセージをこめて穏やかに目を合わせ、一人ひとりの成長を支えていきます。

また特にこの時期は、安全・衛生管理がとても大切です。突然死症候群の発生防止も考え合わせて、お昼寝（午睡）中の睡眠チェックもしっかり行い、清潔な保育環境の整備にも常に気配りをしています。

※「乳児保育」は、法的には「0歳児保育」を指します。ただ、一般的には3歳未満児の保育全般を指すことが多いため、ここでは2歳以下の子どもの保育を示す用語として用いています。

自発性を育てる工夫をしています

子どもたちの関心は周囲360度縦横無尽。「何か面白いことはないかな」。「これはなんだろう」。そうした子どもの興味関心をぐっと深めていく、それが保育士の仕事でもあります。「次は、これ！その次は、これ!!」と子どもたちを束ねるように保育士が率先指導していく保育では、子どもたちは、言われたまま、言うことを聞く姿勢となってしまいます。

子どもたちの日頃の育ち（成長発達）、活動の様子を見取りながら、子どもたちが垣間見せる「これ、面白そう～!」という気配を察知すること。その興味関心をさらに深め、広げていくように保育士は支えていきます。そのためには、保育士は常に“保育のポケット”が豊かになるように努力しています。子どもたちに伝えたら好奇心をもちそうな遊び、造形素材（用紙や粘土など）、抱いた疑問を自ら調べられるような図鑑などの用意…。と同時に、子どもたちの思いもかけない質問にも答えられるように、保育士自身も日々学びを重ねています。

中には、もともと友達同士での遊びがあまり得意ではない子どももいるでしょうし、どの子も一人静かに過ごしたい時もあるでしょう。保育士は、そうした一人ひとりの個性やその時々の様子を見取り、適切に必要な援助をしていきます。そうしてこそ、子どもたち自身の発想から生まれる、保育園ならではの「子どもの学び＝教育」が展開されていくのです。

7

保育の記録

記録を通して保育を振り返り、保育の計画を立てています

ビジネスの世界でよく聞く「PDCA」は、プラン（計画）→実行→チェック（振り返り）→アクション（再試行）というサイクルで、その取り組みをよりよくしていくというサイクルですが、子どもたちの成長とともにある保育の場でも、この発想は生かされています。

たとえば、「ドキュメンテーション」。子どもたちの育ちや学びを可視化（見えるように表現）することですが、たとえば「今日こんなことがありました」という記録を、写真にキャプションを添えるようなスタイルで表現していくと、送迎で訪れる保護者の方々への何よりの保育実践報告となり、同時にそれは、保育士の保育実践記録ともなっていきます。

そうした記録で保育士自身が保育を振り返っていくことにより、次の展開はこうしていこうというような「保育計画（年間、月間、週そして毎日の日案というプラン）」を立案していくことができます。その際、保育計画とはいっても、保育士が計画した通りに子どもたちを指導・誘導していくのではありません。その時々の子どもたちの動きや育ちに応じて、当初立てた計画も柔軟に変更していってこそ、保育の指導計画といえます。子どもたちの日頃の動きや興味関心を把握しているからこそ、「運動会ではこのような種目も子どもたちに提案してみよう」などと考えることもできるのです。

一方、そもそも保育士にとって書くことはとても大切な業務の一環です。保護者との連絡帳のほかに、日々の保育日誌、保育記録、職員会議の記録、また、卒園間近な年長の子どもたちをスムーズに小学校につないでいくための保育要録（受け渡しの記録）も必要です。保育士は、そうした記録の書き方なども、実地で鍛えられつつさまざまな園内外の研修で学んでいきます。